

北海道人のソウルミュージック 子供盆おどりを北海道遺産に



山中 憲治 (やまなか けんじ)

1949年小樽市生まれ。72年北海道大学法学部卒。同年北海道開発庁（現国土交通省）入庁。建設省（当時）建設振興課長補佐、北海道開発局総務課長などを経て、北海道開発局開発監理部長で退官。その後（財）北海道河川防災研究センター（現（一財）北海道河川財団）、北海道建設業信用保証（株）に勤務し、20年退職。東京都在住。

1 2022年10月、北海道遺産協議会は第4回の選定結果を発表、北海道遺産は全部で74件となった。

さて、盆踊りは念仏を唱えながら踊る平安時代の念仏踊りに発する日本の伝統芸能で、広場の中央に櫓を立て、踊り手が櫓の周りを回りながら踊るものが多い。誰でも参加できるように踊りは単純な動きで音楽は音頭というのが一般的だ。

ここ数年のコロナ禍で殆どの盆踊りは中止・規模縮小となっただろうが、これが何年も続けば、この大衆伝統芸能は記憶と記録の中に固定されてしまうかもしれない。

北海道の盆踊りは、大人用の盆踊りと子供用の盆踊りとに分かれている。使用される盆歌は、大人用は北海盆歌が優勢だが地方により若干異なるのに対し、子供用はほぼ定番中の定番、あの「シャンコシャンコシャンコシャシャンがシャン」である。

根っからの北海道人は、全国至るところ、子供の盆踊りは「シャンコシャンコ〜」だと思っているのでは

ないだろうか。

かつては私もこれに何の疑いも持っていなかった。しかし、40年程前、東京に転勤して、ようやく浴衣が似合うようになった子供を連れて訪れた近所の広場の盆踊りでは、この歌は全く流れなかったのだ。

裏切られたような気になったことを覚えている。

2 道民の常識は間違い、全くの勘違いだ。

道内に広く定着しているのに、「北海道遺産」に指定されていないのは（相方の「北海盆歌」も指定されていない）、全国版だからと誤解されているためかと疑ってしまうが、この曲は、北海道外では殆ど知られていないのだ（注1）。

それもその筈、この曲は、1952年に北海道教育委員会選定で北海道の子供達を対象に作られたもの。

レコード販売は北海道内のみだった（20年程経ってから全国発売されたが普及しなかった）。

注1 北海道遺産の内、歌・民謡は「江差追分」のみ。選定は公募方式なので、応募が無ければ審査の俎上に上らない。因みに、第4回は4年ぶりの公募だった。

3 第二次大戦後、民衆のエネルギーは復興に軌を合わせるように溢れ出していた。しかし、娯楽に乏しい時代。お盆には伝統的な盆踊りがその受皿となり、街々に櫓が立ち太鼓と歌声が響き渡った。

この当時の盆歌は、お馴染み「北海盆歌」の元歌、「ベッチョ節」だった（ただし、歴史が古い函館・根室地方では異なる）。

北海盆歌発祥の地は三笠市幾春別（図1）。



図1 本家の三笠北海盆踊（三笠市ホームページから）三段の櫓が圧倒的迫力

元々は鉦員達によって「常磐炭鉦節」が持ち込まれ、これが変形した「ベッチョ節」が全道の炭鉦町で歌われていた（小樽市高島から広がった越後の盆踊唄が起源という説もある）。これを、「北海道民謡の父」と謳われた札幌の今井篁山氏が彼の地で採譜し、編曲のうえ歌詞を改訂したのが「北海盆歌」だ。

1954年、「北海炭坑節」としてレコード化され、1957年には「北海盆歌」としてレコード化された。後に三橋美智也が歌って全国区となる（トドメは、御存じ「8時だヨ！全員集合」）。

櫓上から北海盆歌が流れて、大人も子供も一緒に踊るのだが、その歌詞が大問題だった。

盆踊唄には男女間の恋愛感情やナニヤラを歌い上げて楽しむという長い伝統があり、明治期には取り締まりの対象となっていた程だから、炭鉦発の北海盆歌も「北海名物 数々あれどヨ」から「数々」進むと、ドンデン煽情的になっていく。

注2 「ちゃんこ」で始まるのは「ベッチョ節」とは別の歌「ちゃんこ節」の名残り。これもいわゆるバラ歌（猿歌）。七五型の詞が多いので流用は簡単だった。

注3 例えば、1946年から続くNHKのど自慢では、子供が歌謡曲を歌うと上手でも不合格とされていた（「ラジオの昭和」丸山鐵男 幻戯書房 2012。著者はのど自慢の発案者で丸山真男の兄）。

へ浜は大漁で 砂利まで光るヨ 姉コな 姉コ年頃
肌光るヨー（囃子言葉省略）

へ目顔素振りて 知れそなものヨ 石のな 石の地蔵
じゃ あるまいしヨー

へちゃんこ 茶屋の嬢 酒だせ酒をヨ 酒のな 酒の
お酌に 娘だせヨー（注2）

改訂前の元歌「ベッチョ節」は、坑内から解放された奔放なエネルギーが全面展開で、男女の機微に触れて触れて、触れっ放し状態になっていただろうと容易に想像できる。ハイ。

北海道の盆踊りは、ほぼ同じ歌一本槍だから、櫓上の歌い手が次々に交替し、それぞれが自慢の喉を披露する。曲が篁山先生版「北海盆歌」になっても、各地のオリジナル歌詞までが直ちに変わる筈はない。

「これは教育上よろしくない。とはいえ、子供の盆踊りを禁止するのは教育ではない。子供に相応しい盆踊唄を作って普及させよう」と考えたのが、当時の北海道教育委員会と札幌市教育委員会の面々。

もっとも、戦前から1950年代にかけて、「子供が大人の歌を歌うのは好ましくない」、「子供は唱歌や童謡を歌うべきだ」という社会通念が根強くあり、これが背中を押しただろうことは想像に難くない（この通念を打破した革命児が美空ひばりだ）（注3）。

両者の協議を経て出来上がったのが、あの「シャンコシャンコ〜」なのだ。

4 この歌、名を「子供盆おどり唄」という（注4）。

盆踊り会場で歌の名を気にする人はいないし、歌だけ聞くことはないから、ご存じない方々が多いかもしれない。

「北海」や「北海道」を冠に付けなかったことと、教育委員会なのに教育的な内容を含んでいないことが、関係者の慧眼を物語っている。

文部科学省推薦や〇〇教育委員会選定という類いのもの、ましてや、その種の公的機関が率先して旗を振ったものに面白いものは無い。これは常識だが、何事に

注4 レコードやカセットのタイトルは、「おどり」「踊」と「唄」「歌」の組み合わせが入り乱れている。

も例外はある。

この歌、北海道教育委員会が制作依頼したとされる。歌の関係者は次の通り。

- ・ 作詞 坪松一郎 江別町立（当時）第三中教員
茨城県出身。江別で教員生活を送る。
後述の碑文では「郷土童謡詩人」。
- ・ 作曲 山本雅之 キングレコード専属作曲家
戦前から長く活躍し、「森の小人」「海ほおずきの歌」等で知られる。
- ・ 歌 持田ヨシ子 キングレコード児童童謡歌手
当時は児童童謡歌手（大半が少女）の全盛期で、川田正子、安田章子（由紀さおり）、松島トモ子等が有名。持田もスターの一人。
- ・ 振付 睦哲也 児童舞踊家（図2）

昭和に入り童謡に舞踊を振付けることが定着。同氏はこの名指導者の一人。

レコード化は1952年5月で、なんと、今もこの音源が使用されているという驚異の長命曲だ。

レコード化は因縁の「北海盆歌」よりも早かったことになる。

作詞者の坪松氏が江別市在住だったことから、江別市が発祥の地とされており、市内野幌の公園に碑がある（図3）。



図3 子供盆おどり唄の碑（絵は筆者）
刻まれている歌詞は2番まで

5 出来上がった「子供盆おどり唄」は、1952年8月、札幌の公園でお披露目された。当時のSPレコードは演奏時間が短い、定着狙いもあって繰り返しかけるのだから、直ぐに擦り減る。盆踊りを子供と大人の部に分ける必要もあり、普及はゆっくりだったようだ。

とはいえ、筆者は、1950年代末、日高地方の小学校低学年の時にこの歌を聞いている。

1963年に摩耗に比較的強いEPレコード化されてやっと普及の速度が上がり、その後、カセットテープになって普及が一層進んだ。残念なことに、現在でも単独ではCD化されていない^(注5)。

ところで、筆者は、1番の「そよそよ風 牧場に 街に 吹けば～」を正確に聴き取れたことがない。

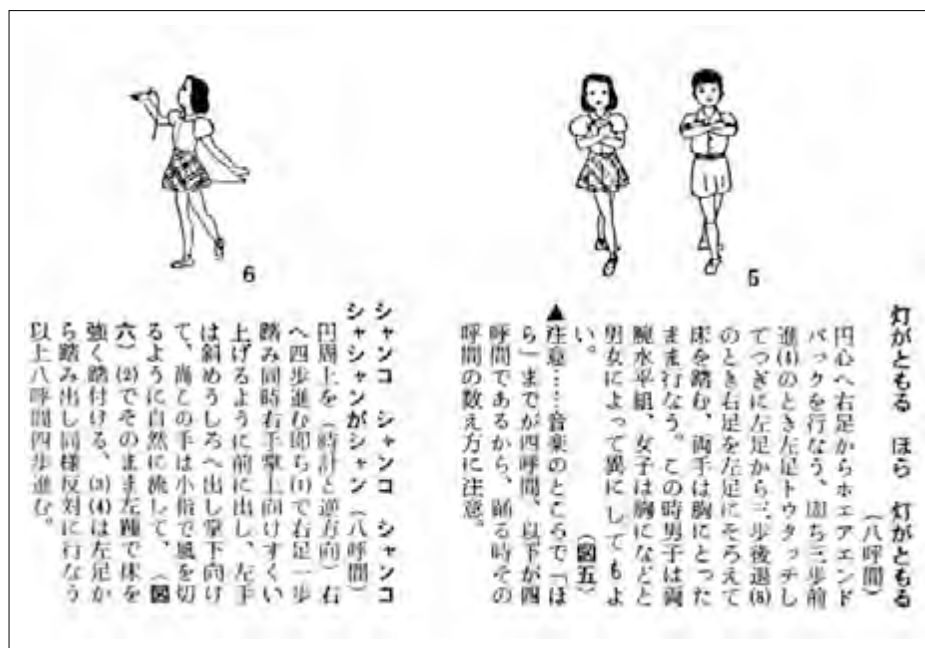


図2 睦氏による振付（カセットテープ付属品 筆者蔵）洋服姿のレトロな絵がたまらない

注5 京都の会社が自社CD「仏教童謡」中に「子ども盆おどり歌」として収録している。

おそらく、広場に鳴り響いていたのが、初期は使い込まれたレコード、後には酷使されたカセットテープ、これを割れるような大音量で流すのだから、歌声が不明瞭になっていたのではないと思われる。

とにかく、同じ曲を1～2時間、流し続けるのだから、1年の内の数日だけの使用とはいえず、これを何年か続けるとどうなるか…ということだ。

あの「シャンコシャンコ～」を「チャンコチャンコ～」と覚えている方が多いのは、持田ヨシ子嬢の声が「チ」に近く聞こえることよりも、後述する理由によるところが大きいですが、テープの劣化でそう聞こえたという面もあるのではないだろうか。

6 「子供盆おどり唄」は元の音源のまま使われ続けているため音質が劣るだけではなく、歌詞も3番までなので、音楽担当者は忙しいし使い続けるからテープも伸びてしまう。

この問題の救世主が、1995年、4～8番の歌詞を追加して登場する。これで、演奏時間は格段に長くなった。しかし、あの「シャンコシャンコ～」は、何故か「チャンコチャンコ～」に変更されていた。

この新盤で覚えた方も多しことだろう。歌手の名からタンポポ児童合唱団版と呼ばれる新盤は、演奏時間の長さに加え新規録音で音質が良いため、多くの会場で使われることになる。



図4 カセットテープの裏面 キングレコード（筆者蔵1個だけですが希望の市町村に進呈します。）A・B両面ともひたすら「子供盆おどり唄」

その結果「チャンコチャンコ～」派が増えていくのだが、この追加・変更は原作詞者の坪松氏側（坪松氏は1969年に逝去）に無断で行われたため、クレームが寄せられ、タンポポ合唱団版は廃盤となってしまった。

しかし、既に出回っていた「チャンコチャンコ～」テープはそのまま残ることになった。

現在、持田ヨシ子版のカセットテープ最新版は（といっても2002年版で、現在は廃盤。音源は不滅の1952年版。）、A・B両面ともこの曲が5曲入りという長時間対策！が講じられている（図4）。

7 「子供盆おどり唄」は、北海道が誇る文化財だ。

アニメソング由来でも世代横断向けでもない。純粹の子供向け盆歌で今も道内各地で健在ではあるが、全国的視点からは正に絶滅危惧種なのだ。

夏の夜に流れ来るイントロ「ドンドン ピーヒャラー」は、私達を心の古里へと導くイントロでもある。

大人の浴衣姿が花火見物か祭りに限定されつつある中（あの崩れた着付けは見るに堪えないぞ!）、子供の浴衣姿が映える盆踊りも、音楽が周囲の安静を妨げるといふことで、ボリュームと踊りの時間に制約がかかっている。

「うるさい」とクレームを寄せる方々には、伝統的文化への理解や敬意を持って、静かに過ごしたいという気持ちを数日間抑えていただけないものだろうか。

「優れた童謡は、長い人生に二度現れる。一度目は子供時代に、二度目は大人になってからの歌として」（寺山修司）^{注6}。

子供達が大きくなった時、北海道人であることのアイデンティティとして胸に刻まれているのはこの唄と踊りではないだろうか。道民の記憶に流れる「子供盆おどり唄」こそ、北海道人のソウルミュージック。

世代を超えたこの文化財を次の世代に引き継ぐのは、道民の責務だ。

「子供盆おどり唄」を北海道遺産に!!

そして、是非ともCDに!!（時代離れし過ぎか）。

注6 日本童謡詩集 寺山修司編著 立風書房 1992。